

D. H. ロレンスとニュー・メキシコ  
— アメリカ先住民に対するロレンスの理解 —

後藤 眞琴

(人文学部人間文化学科言語表象論コース)

D. H. Lawrence and New Mexico  
— Lawrence's Understanding of Native Americans —

Makoto Goto

(Department of Language and Representation, Faculty of Humanities and Economics)

はじめに

ニュー・メキシコでの体験を回想したエッセイ「ニュー・メキシコ」(‘New Mexico’) で、D. H. ロレンス (David Herbert Lawrence) はニュー・メキシコについて次のように述べている。

ニュー・メキシコは私のした外部世界からの体験のうちでもっとも重要な体験であった、と思う。それは確かに私を永久に変えたのである。奇妙に聞こえるかもしれないが、現在の、文明の時代から、つまり、物質と機械の発展する大きな時代から、私を解放してくれたのは、ニュー・メキシコであった。<sup>1)</sup>

さらに続けて、ロレンスは最初のニュー・メキシコ訪問の際に訪れた場所及びその前に住んでいたシチリア (Cycily) について次のように述べる。

南方仏教のもっとも神聖な聖地、セイロン (Ceylon、現在の Sri Lanka) のカンディ (Kandy) で数ヶ月過ごしたが、当時私を支配していた物質主義及び理想主義の大いなる精神に触れるものはなかった。シチリアのこの上ない美しさの中で、つまり、今もなお生きている古代ギリシャの異教精神のまっただなかで数年過ごしたが、当時私の人格の確立の基となっていたキリスト教の本質が破壊されることはなかった。オーストラリア (Australia) での生活は夢を見ているような、忘我の境にあるような状態であったが、忘我の状態は長続きはしなかったので、自己は変わらないでもとのままであった。タヒチ (Tahiti) は、一瞥しただけでいやになった。カリフォルニア (California) は、そこに数週間滞在したあとでいやになった。西部沿岸に宿る霊 (the spirit of place)<sup>2)</sup> には奇妙な残忍性があるように思われた。それで私は、ああ！立ち去らなければ！、と痛切に感じた。(NM 142)

上に引用した、ニュー・メキシコでの体験とカンディ、シチリア、オーストラリア、タヒチ、カリフォルニアでのそれぞれの体験とを比較した言説のなかから、ニュー・メキシコでの体験が、人

間としてまた文学者としてのロレンスの存在の根幹に関わるものであったこと、それが浮き彫りにされてくる。

さらに、ロレンスのニュー・メキシコ体験の核を成すものが二つあることも明確にされる。一つは自然(ニュー・メキシコの風景)である。具体的には、その風景のもつ、<荒々しく、誇り高い静寂>(the fierce, proud silence of the Rockies)(NM 143)であり、<遠く広く拡がっている広大で荘厳な美しさ>(a vast far-and-wide magnificence)(NM 143)であり、<壮麗で黙した恐ろしさ>(a splendid silent terror)(NM 143)であり、<傲慢不遜で恐るべき自負心と冷酷無情、それにもかかわらず、そこに厳然としてある美しさ>(overweening, terrible proudness and mercilessness: but so beautiful, God! So beautiful!)(NM 143)であり、<陽光の力>(the might of the day)(NM 143)である。もう一つは人間(アメリカ先住民)であり、アメリカ先住民から得ることのできる<現存する宗教を解する心>(a sense of living religion)(NM 144)である。

「ニュー・メキシコ」というエッセイだけを読むと、ロレンスの魂はニュー・メキシコに来るとすぐ、その<場所に宿る霊>に接して、それまで依拠してきた世界から新しい世界の中に入ったように思われるかもしれない。しかし、実際にはそうではなかった。

ロレンスがエッセイ「ニュー・メキシコ」を書き上げたのは、1928年12月25日である。メイベル・ドッジ・ルーハン(Mabel Dodge Luhan、ロレンスがニュー・メキシコ体験をするきっかけを作ったアメリカ人女性)からアメリカの「サーヴェイ・グラフィック」紙(*Survey Graphic*)にニュー・メキシコに関する2000語の記事を書いてくれるようにとの要請を受けてから、一週間後である。この時、ロレンスは二度目のニュー・メキシコ体験(1924年3月—1924年10月)を経て、メキシコのオアハカ(Oaxaca)に移り、『羽鱗の蛇』(*The Plumed Serpent*)の最終稿を完成して、1925年9月22日にアメリカを去り、ヨーロッパで3年余りを過ごしてきた。ロレンスがこのエッセイを書いたのはフランスのバンドル(Bandol)でである。この時期、肺結核の症状は鎮静していたが、ロレンスは寒さと湿気の影響を受けやすい気管支のことを心配して(彼は肺結核にかかっていることを認めようとしなかった)、短編小説「太陽」('Sun')に象徴されているように、太陽を求めてスペインに行きたがっていた。しかし、この時期に書かれた手紙に示されているように、<sup>3)</sup> アメリカに行くことをロレンスは完全に断念していたわけでもなかった。

ロレンスはエッセイ「ニュー・メキシコ」を書き上げると、メイベル・ドッジ・ルーハンに手紙を書き、ニュー・メキシコ体験に対するノスタルジアを次のように伝える。

とてもすばらしいと自分では思っている、ニュー・メキシコに関するものを書きました……  
それを書いていたら、ほんとうに(ニュー・メキシコに)戻りたくくなりました——パスポートによって六カ月間しか滞在できなくても春には行きたい。(vii 94)

ニュー・メキシコ体験に対するロレンスのノスタルジアは、エッセイ「ニュー・メキシコ」の後半で七回に渡って繰り返される「私は決して忘れないであろう」(Neve shall I forget)(NM 145-6)という表現のうちにもっともよく示されている。ロレンスはこのエッセイを書きながらニュー・メキシコ体験のあれこれを体験し直そうとしているかのようである。いや、ニュー・メキシコ体験のあれこれを体験し直したい衝動に駆られて、このエッセイを書いているかのようである。

エッセイ「ニュー・メキシコ」の冒頭のことばには、ボーダレスの時代、グローバリゼーションの時代といわれる今日、異なる文化を理解する上で示唆に富むものがあるように思われる。

表面的には、世界は小さくなり、既知のものになった。あわれな小さな地球よ、観光客

たちは(パリ郊外の)ブローニュの森や(ニュー・ヨーク市の)セントラル・パークを急いで歩き回るように容易にお前の回りを足早に歩き回っている。今や不思議なものは何もない、私たちはそこに行って、それを見て、それについてすべて知っているから。私たちは地球を知ったので、地球は知り尽くされた。

これは、表面的には、まったくその通りである。表面的には、つまり水平的・平面的には、私たちはあらゆる所に行って、あらゆることをして、すべて知っている。それにもかかわらず、私たちは、表面的に知れば知るほど、垂直的には、ますます内部に入り込んでいかなくなる。(NM 141)

ロレンスはニュー・メキシコの内部に入り込んでいくには、もう一度ニュー・メキシコに行き、生活してみなければならなかったのである。

本稿では、まず、ロレンスがアメリカからイギリスに帰らなければならなくなった時の彼の心情について触れ、次にロレンスが再度ニュー・メキシコに行くようになった経緯について見る。最後にロレンスの二度目のニュー・メキシコ体験のおよそ一ヶ月後に書かれた二つのエッセイと一編の詩を取り上げ、考察していく。その考察を通して、二度目のニュー・メキシコ体験によって、ロレンスの「魂の新しい部分が突然覚醒し、新しい世界が旧い世界に取って代わった」(NM 142) 実態を明らかにして、異なる文化を理解する手がかりを探ってきたい。

## I

ロレンスが再度ニュー・メキシコに行くようになった経緯について触れる前に、彼がアメリカからイギリスに帰ることになった当時の彼の心情について見ておきたい。当時のロレンスの心情と再度のニュー・メキシコ行きとは密接に関連していると思われるからである。

重要なことは、ロレンスがイギリスに帰りたくて帰ったわけではない、ということである。妻フリーダの帰ってくるようにとの強い要請をロレンスはしぶしぶ受け入れて、1923年11月22日にメキシコ(Mexico)のヴェラクルス(Veracruz)からドイツの客船トレド号(Toledo)でイギリスに向かった。フリーダは子供たちや母に会いたい思いに駆られて、3ヶ月前の8月18日に独りでヨーロッパに旅立っていたのである。ロレンスはその時妻と一緒にイギリスに帰る船の予約をしていたのだが、それも妻の意向を受け入れてそうしただけであったので、結局帰らないことにしたのであった。キャサリン・カーズウェル(Catherine Carswell)によると、ロレンスがイギリスに帰るフリーダを見送りに行った際、二人は棧橋でそれまでしたことのないような激しい喧嘩をしたので、二人ともそれぞれこの別離は永久の別れになるのではないかと感じたという。<sup>4)</sup> ロレンスはイギリスに向かって旅立つ時、ゲッチェ(Koi Götche、デンマーク人、画家、最初のニュー・メキシコ、タオス(Taos)滞在中に知り合い、親しくなった、タオスの芸術村(the colony of artists)の一員、ロレンスがフリーダと別れたあとアメリカでもメキシコでもロレンスと行動をともにしていた)と一緒にいた。デンマーク(Denmark)に行くゲッチェの旅費はロレンスが出した。このようにしてゲッチェと一緒にヨーロッパ行きの船に乗り込んだということには、独り旅を嫌うと同時に、イギリスに戻るのがいやいやながらであるというロレンスの心情の一端が現れているように思われる。

妻フリーダの強い要請をしぶしぶ受け入れ、イギリスに帰る船上のロレンスの心情はいかなるものであったろうか。この船旅の間にロレンスの書いたものは二通の絵はがきしか知られていない。二通ともキューバ(Cuba)のハヴァナ(Havana)についたことを知らせる簡単なもので、出港して3日後に寄港したハヴァナで書かれたもの。一通は姪のマーガレット(Margaret Emily King、

ロレンスはペギィ (Peggy)、ペグ(peg)と呼んで可愛がっていた)に宛てたもので、この絵はがきが届く前にイギリスにいることを知らせる。<sup>5)</sup> もう一通はメリルド (Knud Merrild、デンマーク人、画家、ゲッチェの友人で、タオスの芸術村の一員、ゲッチェと共にデル・モンテ (Del Monte) 農場でロレンス夫妻と共に生活した)に宛てたもので、船上の生活にすでにうんざりしていることを知らせる (iv 541)。これら二通の絵はがきから、船上のロレンスの心情を推察することは極めて難しい。それで、ロレンスの心情を推察するには、彼の未完の小説「トビウオ」(‘The Flying Fish’)に頼らざるを得ない。この小説の主人公ゲシン・デイ (Gethin Day)の経験はロレンス自身の経験に基づくものであると言われていて、小説「トビウオ」は自叙伝体の物語である(注、ケンブリッジ版・序 xxxv)。<sup>6)</sup>

未完の小説「トビウオ」は二度目のニュー・メキシコ滞在中にメキシコを訪ねていて、病いに倒れていたときに書かれたものである(1925年3月11日から3月25日頃)。40ページある原稿の最初の9ページはフリーダに口述したものである。ロレンスは書くことが困難な状態にあったからか、あるいはフリーダのいうように、ロレンスは書くことを医者から禁じられていたからである(MO xxiv)。この小説の第一節(‘Departure from Mexico’)の最初の部分は、病いに倒れたあとの小康状態の間にメキシコのアオハカから列車でニュー・メキシコに戻ったロレンスの経験に依っている。第一節の最後のヴェラクルスの叙述と第二節(‘The Gulf’)、第三節(‘The Atlantic’)は妻の要請にしぶしぶ応じてイギリスに帰ったヴェラクルスからイギリスのプリマス (Plymouth)までのロレンス自身の船旅(1923年11月22日~12月11日)の経験に依っている。

妻フリーダの強い要請に応じてイギリスに帰っていく途上のロレンスの心情は、船首の前を船のスピードに合わせ泳いでいく一群のネズミイルカ (porpoises)の動きを捉える主人公ゲシン・デイの捉え方に強く反映されている。ネズミイルカの動きを動くがままに適切に表現しながら、その動きの捉え方のうちに見る者の心理・心情を織り込んでいくロレンスの巧みな手際よい描写力を伝えるために、原文をそのまま引用したい。

Gethin Day watched spell-bound, minute after minute, an hour, two hours, and still it was the same, the ship speeding, cutting the water, and the strong-bodied fish heading in perfect balance of speed underneath, mingling among themselves in some strange single laughter of multiple consciousness, giving off the joy of life, sheer joy of life, togetherness in pure complete motion, many lusty-bodied fish enjoying one laugh of life, sheer togetherness, perfect as passion. They gave off into the water their marvellous joy of life, such as the man had never met before. And it left him wonderstruck. (MO 221)

そして、ゲシン・デイは驚嘆のうちに次のように思う。

これは、私がこれまで見てきたうちでもっとも純粋で混ざりもののない歓喜に達したものだ、これらたくましい何も気にとめない魚たち。人間は共に生きて、皆が一緒に喜び合うような一つの笑いを作り出す秘訣を、しかも、それぞれの魚がそれぞれ思い通りにしている、そのような生の秘訣を手に入れなかった。(MO 221)

ロレンスは妻フリーダの強い要請でしぶしぶイギリスに帰っていく。その途上で船首の前を泳いでいく一群のネズミイルカの動きをじっと見つめていて、その動きのうちに妻と共に、そして友人

たちと共に喜び合って生きていく生き方の一つの答えを見出す。一群のネズミイルカは、ロレンスがその実現を願って止まないラーナーニム (Rananim) を実現しているのである。

ラーナーニムとはロレンスの希求する共同社会である。彼の希求するラーナーニムは第一次世界大戦中に考え出されたもので、それは、ロレンスのことばをそのまま使えば、次のようなものである。

私は20人ほどの人間を集め、戦争と不潔さわまるこの世界から船出して、小さなコロニーを設立したい。そこでは金銭はなく、生活必需品に関する限り、一種の共産主義社会制度となる。そこには真の品位がある。それは共同体の各成員の真の品位に基づいて設立されるコミュニティとならなければならない——成員は善であるという前提に基づいて設立される共同体であり、悪であるという前提に基づくものではない。<sup>7)</sup>

そして、ラーナーニムでの生活は、<唯一の富が人格の高潔であるので、各成員は自己の本性を最大限に発揮し、自己の内心の欲望を極限まで満足させるのであるが、しかし、究極の満足と歓喜は私たち全成員が完全に一体となることにある> (ii 271)、というものである。

ロレンスがロンドンに着いてまもなく、ネズミイルカの動きの中にその実現の一例を見出したラーナーニムをニュー・メキシコで実現すべく、友人たちに話したとしても不思議なことではない。

キャサリン・カーズウェルによれば、ロレンスが生涯でただ一度家庭外で開いた晩餐会は、「カフェ・ロイヤル (Café Royal) 晩餐会」であったという (SP 206)。その晩餐会で、ロレンスは招待した友人たちの一人一人にニュー・メキシコに行って新しい生活を始めようと訴えたのである。「カフェ・ロイヤル晩餐会」の開かれたのは、ロレンスがアメリカからロンドンに到着して9日から13日後の間であると考えられている。「カフェ・ロイヤル」はロレンスがよく知っていた唯一のロンドンの高級レストランである。ロレンスはアメリカで印税による収入がかなりあるようになっていたので、第一次世界大戦中に世話になった友人たちに感謝するためにこの晩餐会を開いたのである。出席者はロレンス夫妻を含めて10人というささやかなものであった。招待された友人たちはキャサリン・カーズウェルと夫のドナルド (Donald)、S. コテリアンスキイ (Samuel Koteliensky)、ジョン・ミドルトン・マリ (John Middleton Murry)、ドロシー・ブレット (Dorothy Eugenie Brett)、マーク・ガートラー (Mark Gertler)、メアリー・キャンナン (Mary Cannan) である。ニュー・メキシコでラーナーニムの生活を始めようという訴えに反対したのはメアリー・キャンナンだけであった。他の友人たちはみなロレンスの訴える切迫感とアルコールに負けて肯定的な答えをした。<sup>8)</sup>

しかし、「カフェ・ロイヤル晩餐会」のあとで、ロレンスに従ってニュー・メキシコに行く態度を明確に示したのは、ブレットとマリの二人だけである。周知のように結局のところ、ロレンス夫妻と共にニュー・メキシコに行ったのはブレットだけであった。しかし、ニュー・メキシコに旅立つ前日、ロレンスが義母のアンナ・フォン・リヒトフォーヘン男爵夫人 (Baroness Anna von Richthofen) に「ブレットは一緒に行く。マリはあとで来る」(iv 598)と断言していることを考慮すると、ロレンスはニュー・メキシコでのラーナーニム実現に望みをかけて、1924年3月12日にイギリスをあとにしたのかもしれない。

イギリスに戻って、ロンドン、故郷のノッティンガム (Nottingham)、フレデリック・カーター (Frederick Carter、画家で占星術や神秘学に興味を持っていた) に会うために出かけて行ったシュロップシャー (Shropshire、現在はSalop、カーターとの出会いはロレンスの最後の本『アポカリプス論』(Apocalypse)を産み出す)、<sup>9)</sup> パリ、バーデン・バーデンで過ごしたヨーロッパでのロレンスの3カ月の生活は、ハリイ・T. ムア (Harry T. Moore) の言うように、惨めなものであつ

た。<sup>10)</sup> ロレンスがアメリカに残っている間に、フリーダとマリは親密な関係にあったのではないかという疑念、マリの創刊した月刊雑誌『アデルフィ』(Adelphi) に対する不満、風邪に悩まされる日々。その3カ月の生活は次の二通の手紙にほぼ要約されているのではないと思われる。一通はイギリスに帰ってきて二日後に義母宛てにドイツ語で書かれたもの、もう一通はニュー・メキシコに戻る5日前にカーター宛てに書かれたものである。

再びここに帰ってきました。フリーダはすてきですが、イギリスはいまいます。私はわなにかかった野生の動物のようです。ここはそんなに暗く閉じ込められているので、自由に呼吸している人は一人もいません。しかし、イギリスの人々はみな友好的です。フリーダはすてきなフラットを持っています——しかし、私は檻に閉じ込められたコヨーテのように歩き回り、休むことができません。今月の末にパリに行き、そのあとバーデンに行こうと思っています。

私の遠吠えが聞こえますか。 (義母宛ての手紙、iv 542)

来週の水曜日アキタニア号 (Aquitania) でニュー・ヨークに向かおうと思っています。私の出版社が変になっているように思われるのです。それで急いで行かなければなりません。マリが『アデルフィ』に例の占星術に関する記事を掲載していないのを知って私のがっかりしました。彼は4月号に載せると言っています。しかし、彼はそれを3月号に掲載するために受け取ったはずだ。ふん、彼は信用できない。

私はヨーロッパにも、ヨーロッパのせかせかせしているせわしなさにも、ヨーロッパの複雑さにもうんざりしています。 (カーター宛ての手紙、iv 593)

カーター宛ての手紙については、補足しておいた方がいいかもしれない。ロレンスがアキタニア号を選んだのはイギリスのサウサンプトンからニュー・ヨークまで6日間という速さのためであった。アメリカの出版業者トマス・セルツァ (Thomas Seltzer) の経営する会社は1919年に営業を始めた小さな会社で、ロレンスの小説『恋する女達』(Women in Love) を出版する出版社がなかった時、1920年に私家版で出版した。それ以来ロレンスの作品を出版し続けていた。ロレンスのアメリカでの印税収入の増大は彼に依るところが大きい。その会社が経営不振に陥っていたので、ロレンスは急いでアメリカに行く必要があると思ったのである。なお、〈例の占星術に関する記事〉とは、カーターの「古代の占星学」('The Ancient Science of Astrology') というエッセイである。ロレンスがシュロップシアアのカーターを訪ねた時、二人はシンボリズムの研究方法、魂についての古代人のもろもろの考えとその妥当性、世界の終末に関するエッセイを書き、本を出版することなどについて論じ合った。

ロレンスがニュー・メキシコをラーナーニム実現の場所として選んだのは、ブレンダ・マッドクス (Brenda Maddox) の主張するように、健康上の理由を十分考慮に入れてのことであろう。<sup>11)</sup> それと同時に、ロレンスにはイギリスはく大英帝国のなかでほんとうに軟弱な場所、腐った場所であるという確信があった。<sup>12)</sup> その確信は、第一次世界大戦を契機に産み出され、その後のヨーロッパ体験の中で募っていったヨーロッパキリスト教文明そのものに対するロレンスの強い不信の念に基づくものである。ロレンスはヨーロッパキリスト教文明の知に取って代わるべき知を新大陸・新世界のアメリカに求めたのである。そのきっかけを作ったのがメイベル・ドッジ・スターン (Mabel Dodge Sterne、再婚後 Mabel Dodge Luhan) であった。メイベルはロレンスにニュー・

メキシコのタオスに来て、滅びつつあるアメリカ先住民の魂とその生活を書き留めてほしいと懇請した。ロレンスはその懇請に答えてニュー・メキシコ体験をした。<sup>13)</sup>そして、もう一度ニュー・メキシコに行くことを決めたのである。

## II

エッセイ「ニュー・メキシコ」の後半で七回に渡って繰り返す「私は決して忘れないであろう」の「忘れない」ものはいずれもニュー・メキシコで接したアメリカ先住民に関わるものである。それで、二度目のニュー・メキシコ滞在のはじめにロレンスの接したアメリカ先住民に関する彼の言説に注目したい。アメリカ先住民との接触はロレンスにどのように作用したのか。その作用をロレンスはどのように受けとめたのか、受けとめようとしたのか。そういったことを考察するためには、アメリカ先住民に接したあとで書かれたロレンスの二つのエッセイと一篇の詩に依るのがいいだろう。二つのエッセイとは「アメリカインディアンと娯楽」(‘Indians and Entertainment’)、*「芽を出すとうもろこしの踊り」*(‘Dance of the Sprouting Corn’)であり、一篇の詩は「ああ！アメリカ人たちよ」(‘Oh! Americans’)である。

エッセイ「アメリカインディアンと娯楽」は、1924年4月9日にタオスのプエブロ（アメリカ先住民の集落）でアメリカ先住民の踊る踊りを見たあとで書かれたものである（踊りを見た11日後の4月20日までには書き上げられていた）。標題が示しているように、このエッセイでロレンスはアメリカ先住民の娯楽について述べているのであるが、アメリカ先住民の娯楽一般について述べているわけではない。ロレンス自身が見て、体験したものに基づいて述べているのである。

ロレンスはアメリカ先住民の踊りを娯楽と捉えて、現代文明のもとに生きている白人の娯楽とアメリカ先住民の娯楽の違いを明らかにしようとする。白人の娯楽とアメリカ先住民の娯楽を対照しながら、ロレンスはアメリカ先住民の意識の深部にたどりつこうとする。

ロレンスは白人の娯楽とアメリカ先住民の娯楽の違いを明らかにするに当たって、次のことを前提にする。

- ① アメリカ先住民の意識の仕方は白人の意識の仕方とは異なっていて、二つの意識の仕方は互いに相手の意識の仕方に対してきわめて有害なものである。
- ② これら二つの意識の仕方は決して一つになることもできないし、調和することもできない。
- ③ 私たち白人は私たちの意識を殺すことによってしか、アメリカ先住民の意識を理解することはできない。
- ④ 私たち白人がすることのできる唯一のことは、二つ以上の意識の仕方を見ることのできる「聖霊」(Ghost)を私たちの内に持つことである。一人の人間は意識の仕方において、同時に二つ以上の世界に属することはできないからである。<sup>14)</sup>

これらの前提は、ロレンスが二度目のニュー・メキシコ体験によって、発見・認識したものに基づいている。④において用いられている「聖霊」とは、対立的関係にあるとされるものを止揚するものの象徴として、ロレンスが使うことばである。ロレンスは当時の白人のアメリカ先住民に対する態度を批判的に見るようになって、このように認識するに至ったのである。

ロレンスは当時の白人のアメリカ先住民に対する態度を二つに大別している。一つは一般大衆のアメリカ先住民を嫌悪する態度であり、もう一つはインテリのアメリカ先住民に対する感傷的な態度である。インテリの態度に対するロレンスの批判は痛烈である。＜インテリは精神的に策略をめ

ぐらせて、自分自身も他人もごまかして、アメリカインディアンが私たち白人よりも真の理想的な神々に近いと信じるようにしている> (MM 53)、とロレンスはインテリのアメ리카先住民に対する態度を批判する。アメリカ先住民に対する一般大衆の態度もインテリの態度もアメリカ先住民に対して感じる同じ感情に由来している、とロレンスは捉える。その感情とは<アメリカインディアンは私たち白人に調和しない、私たち白人の方に歩み寄って来ない、アメリカインディアンの存在の仕方全体が私たち白人と異なっている>(MM 52-3)というものである。

さらに、ロレンスは白人の娯楽とアメリカ先住民の娯楽の違いを明らかにするに当たって、演劇は古代ギリシャの初期の宗教儀式から発展したものであるという考え方を前提とする。この考え方は、デイヴィット・エリス (David Ellis) が指摘しているように (DG 179)、ジェイン・ハリソン (Jane Harrison) の『古代の芸術と祭式』(Ancient Art and Ritual) に依るものであろう。ロレンスはこの本を読んで感銘した旨を、クロイドン (Croydon) で小学校の教師をしていたときの同僚の一人に宛てた1913年10月28日付けの手紙で述べているからである (ii 90)。

アメリカ先住民の娯楽についての考え方を理解するためには、私たち白人自身の娯楽についての考え方を打ち壊さなければならないとして、ロレンスはヨーロッパの演劇の起源にまで遡る。そして、ロレンスは次のように主張する。通常古代ギリシャにはある特定の神がいて、儀式はその神に捧げられた。この神が演じられる演劇の本来の観客である。儀式はその神を喜ばせるために演じられる。これが演じる者と観客のいる劇場の始まりである。ヨーロッパの演劇では、演じる者と観る者とが最初から分断されていた。観る者は「神」、「女神」であり、演劇はその者に捧げられた。「神」、「女神」は、結局のところ、ある特定の思想や考え方に占有される「精神」に帰着していく。長期にわたる発展の過程で私たち自身が私たち自身の演劇の神々となる。演劇=見せものは私たちに捧げられる。私たちはある一つの排他的な考え方に支配された「精神」という上座に座り、その見せものを裁定する。

そして、ロレンスは自分の見たアメリカ先住民の踊り、<とうもろこしを成長させる歌>、<太鼓の回りを輪になって踊る踊り>、<火の回りを踊る小規模な踊り>、<新年に踊る壮観な鹿踊り>を、彼の捉えたままにことばで再現しようとする (MM 55-7)。そうすることによって、ロレンスは白人としての意識を捨て去り、アメリカ先住民の意識に近づこうとする。

ロレンスの捉えたアメリカ先住民の意識は次のようなものである。アメリカ先住民には神はいない。アメリカ先住民は自分たちが神によって創造されたものであるとは考えない。アメリカ先住民には定義された神の概念がない。アメリカ先住民にとって、創造とは優しくもあり恐ろしくもある波となって永久に流れている大洪水である。すべてのものの内には創造の不思議なゆらめきがあり、創造されたものの結末というものがない。「神」と「神」による創造物との区別、「精神」と「物質」との区別はない。すべてのものが創造のふしぎなゆらめきなのである。そのゆらめきは死をもたらす場合もあり、優しさをもたらす場合もある。創造には恐るべき敵も優しい友も含まれているのである。

アメリカ先住民の意識をこのように捉えるロレンスは、出陣化粧をし、関の声をあげ、老婆の喉をかつ切るアパッチ族の戦士も創造の不思議の一部であると捉える。アメリカ先住民がはりつけになったイエスを、情け深い聖母マリアを受け容れるのは、いずれも創造の不思議の内にあるという意識に基づくものである、とロレンスは捉える。

そして、ロレンスは<私たち (=白人) は創造というもののすべての部分に答えていかなければならない> (MM 60)、と主張する。

ロレンスはアメリカ先住民の踊りを次のように捉える。アメリカ先住民の踊りには、ヨーロッパの演劇に見られるような演じる者と、観る者との分断はなく、「神」も「観客」も「精神」も存在しな



い。支配的な考え方もなく、裁定もない。アメリカ先住民は自分自身の演じる演劇の不思議の一部となっている。その演劇には始めもなく、終わりもなく、すべてのものが含まれている。その演劇は裁定されることもない。演劇の外には裁定するものなど何も存在しないからである。

さらに、ロレンスはアメリカ先住民の踊りを次のように捉えて、アメリカ先住民の意識に達しようとする。アメリカ先住民の踊りでは、精神は仕えるものとしてあるだけで、人間を創造の不思議にただ一途に忠実であるようにするだけである。創造の不思議というものがつねにあるからである。精神は創造の不思議の前で屈服する。精神は善悪を判断するのではなく、真偽を判断するのである。

そして、ロレンスはアメリカ先住民の意識について次のような結論を下す。アメリカ先住民は、アメリカ先住民の意識の内に生きている限り、二つの否定的な戒めと一つの肯定的な戒めしか持っていない。否定的な戒めの一つは<汝、嘘をつくな>、もう一つは<汝、臆病者にはなるな>、肯定的な戒めは<汝、不思議を認めよ> (MM 61)。アメリカ先住民にとって、悪とは嘘をつくこと、臆病であることにあり、悪意は呪術、つまり、創造の不思議を個人の精神と意思、個人のうぬぼれのために悪用することである。徳は創造の不思議に雄々しく応ずることにある。

ロレンスはアメリカ先住民の徳の具体化されたものをアメリカ先住民の行うリレー競走のうちに、次のように捉える。アメリカ先住民がリレー競走をしているのは、競走に勝つためでもなく、賞を得るためでもなく、勇気を見せるためでもない。彼らは<半ば苦しみでもあり、半ばエクスタシーでもある緊張のうちに全力を出して、トラックのない創造というもののトラックで果てしなく繰り広げられる人類の競走で、自分たちの種族が来る年も来る年月々の変転を切り抜けていくことのできる創造力を自分の魂の中にもっともっと取り入れようと努力しているのである> (MM 61-2)。

そして、アメリカ先住民のリレー競走に象徴される努力を、<それは雄々しい努力であり、人間がしなければならない、し続けなければならない聖なる雄々しい努力である> (MM 62)、とロレンスは高く評価する。

### III

エッセイ「芽を出すとうもろこしの踊り」は、サント・ドミンゴ (Sant Domingo) のプエブロでアメリカ先住民の踊る踊りを見たあとでまもなく書かれたものである。ロレンスはエッセイ「アメリカインディアンと娯楽」を書き上げてから2・3日後にその踊りを見た。<私は一日か二日の予定でここに来た、アメリカインディアンの踊りを見に。私はアメリカインディアンの踊りがとても好きなのだ><sup>15)</sup>とロレンスはキャサリン・カーズウェル宛ての絵はがきにその踊りを見に行ったときに書いている。エッセイ「芽を出すとうもろこしの踊り」からも感じ取れることだが、ロレンスはアメリカ先住民の踊る踊りがほんとうに好きなのだ。

しかし、アメリカ先住民の踊る踊りが好きなロレンスはヨーロッパ白人の意識の仕方をするイギリス人である。エッセイ「芽を出すとうもろこしの踊り」は、南西部特有の<色あせた乾ききった大地> (Pale, dry, baked earth)<sup>16)</sup> の上を車で踊りを見に行く途上の簡潔で手際の良い描写から始まる。始めて見るサント・ドミンゴのプエブロを捉えるロレンスの捉え方のうちに、ヨーロッパ白人の意識の仕方をするロレンスとアメリカ先住民の踊る踊りが大好きで、エッセイ「アメリカインディアンと娯楽」を書き上げたロレンスが混在している。サント・ドミンゴのプエブロの家々は<泥まんじゅうのような乾いた泥> (MM 63)で、<今にも崩れ落ちてちりになり、目に見えなくなってしまう> (MM 63)のではないかと、ヨーロッパの白人であるロレンスの意識は捉える。しかし、アメリカ先住民の踊る踊りが大好きで、エッセイ「アメリカインディアンと娯楽」を書き上げたロレンスは次のように捉え直す。

それら(=サント・ドミンゴのプエブロの家々)が崩れ落ちないのは不思議だ。古代ギリシャの大理石が転がり落ちて粉々になり、大聖堂がぐらついているのに、これらの小さな四角形の泥を積み重ねたものが、何世紀も何世紀も持ちこたえているのは不思議だ。だが、一片の柔らかい泥を新たに手にする人間の裸の手が時の経過よりも素早く、何世紀であろうと、ものともしないのだ。(MM 63)

そして、ロレンスは<芽を出すとうもろこしの踊り>を見た体験をことばで再現しようとする。その踊りそのものが動く小さな森のようだという印象を持ちながら、そのことを太鼓の音、太鼓の近くで歌う長老たちの声、踊っている男たち、女たち、道化たち、それらの特徴を通して描き出そうとしているとき、ロレンスは自分自身にもう一度言い聞かせているかのように読者に言う、<少しづつわかるのだ、全体についての印象はまだだ>(MM 64)と。

アメリカ先住民の踊る<芽を出すとうもろこしの踊り>を見ているロレンスは真剣だ。真剣に踊りを見続けているうちに、ロレンスは踊っているアメリカ先住民の意識を次第に理解していく。踊っている男たち、女たちの装い、手足の動き、腕のバンドに結びつけた松の小枝の動き、膝のゲートルにつけた鈴の音、太鼓の音、太鼓を囲んで歌うかなり年配の男たちの声、道化たちの装いとその動き、ロレンスはそういったものを一心に聴き、見つめ続けているうちに、ロレンスのヨーロッパ白人の意識は弱まり、弱まった分だけ、アメリカ先住民の意識に近づいていく。

エッセイ「アメリカインディアンと娯楽」のなかで、ロレンスがアメリカ先住民の意識を理解するための前提としていること、つまり、<私たち白人は私たちの意識を殺すことによってしか、アメリカ先住民の意識を理解することはできない>ということは、アメリカ先住民の踊る踊りを見る体験を通しての彼自身の実感に基づくものではないかと思われる。アメリカ先住民の踊る踊りを見ることによって、ロレンスはアメリカ先住民の意識に近づき、ヨーロッパ白人の意識から産み出されたものとは異質のものを探り出していく。そして、探り出したものがロレンス自身が生きていく上でも、人間が生きていく上でも価値があると思われるので、ロレンスはアメリカ先住民の踊る踊りが大好きだったのだろう。

<芽を出すとうもろこしの踊り>を見ることによって、ロレンスはアメリカ先住民の意識に近づき、その意識の産み出したものを探り出す。それは次のようなものである。

人間は、主人として、自分の目的を成し遂げる。人間はとうもろこしの発芽にかかわり、とうもろこしが成長し、穂を出し、実ることにかかわる。そして、ついに人間は自分のパンを食べるとき、自分の一度放出したものをすべて取り戻し、広大な宇宙から、とうもろこしに呼び込んであげたエネルギーに再びあずかる。(MM 69)

ロレンスがアメリカ先住民の意識から探り出したもの、それは、人間は人間の方から自然と密接にかかわっていくことによってしか生きていくことができない、ということである。

ロレンスの詩に「ああ！ アメリカ人たちよ」という213行におよぶ長い詩がある。この詩は<今日は復活祭、キリストのよみがえった日だ！ 二日前は聖金曜日、キリストがはりつけにされた日だ！>(Today is Easter Sunday : Christ Risen! Two days ago was / Good Friday : Christ Crucified!)<sup>17)</sup> という107-8行目の詩句から、1924年4月20日に書かれたということが確認されている。この日までにロレンスがエッセイ「アメリカインディアンと娯楽」を書き上げていたことは前述したとおりである。

この詩が書かれるようになったきっかけは、上に引用した詩行に続く<聖金曜日にアメリカイン

ディアン局の偉い白人の男たちとアメリカ政府の偉い白人の男たちが車でプエブロにやって来て、アメリカインディアンの長老たちを呼び出し、そしてドアを閉めて会議を開いた> (On Good Friday the big white men of the Indian Bureau / and big white men from Washington drove out to / the pueblo, summoned the old Indian men, and / held a meeting behind closed doors) (CP 777)という事件である。これまでに引用した6行の詩行に暗示されているように、ロレンスはこの事件をキリストの磔刑のように、アメリカ先住民をはりつけにするものであると捉える。このあと38行にわたって、ロレンスはこの事件を皮肉たっぷりに描写する。それを引用すると長くなるので、ロレンス独特の皮肉は敢えて無視して、ロレンスの捉えたこの事件の内容をかいつまんで説明することにした。

タオスのプエブロにやってきたアメリカインディアン局とアメリカ政府の役人たちはアメリカインディアンの長老たちに次のようなことを話した。

- ① 愚かな邪教の踊りと儀式を行うのをやめて、もっとよく土地を耕すこと。
- ② 子供たちを学校に通わせること、儀式の準備をさせたり、儀式に参加させたりして学校を休ませないこと (1920年にアメリカ先住民の子供たちの教育は義務制とされた)。
- ③ アメリカインディアンの若者が真の百パーセントのアメリカ人になることは、踊りなどをする野蛮人のままでいるよりずっとずっといいことである。
- ④ 自分たちの大義をかかげて活動している芸術家たちや髪を長く伸ばした人々を信頼すべきではない。彼らはアメリカインディアンを現状のままに抑えておいて、百パーセントのアメリカ人にならせまいとしているのだ、彼らはアメリカインディアンの絵を描いたり、アメリカインディアンについて書いたりして、アメリカインディアンによって生計を立てているのだから、アメリカインディアンを貧しいままにしておきたがっているのだ。もし、アメリカインディアンが百パーセントアメリカ人になったら、アメリカインディアンの友人である白人と対等の条件で、他のすべての人と同じように金持ちになるだろう。
- ⑤ アメリカインディアンは、自分たちは貧しい、収穫が少ない、白人の政府が農具を与えてくれたらもっと食べ物を得られるのにと不平を言っているが、アメリカインディアンが持っている土地をアメリカ政府に賃貸したら、その見返りにすばらしい農機具を与えるだろう。(CP 777-8)

この詩で、ロレンスはアメリカ先住民の置かれている状況認識を基に、アメリカ先住民の存在を高く評価し、アメリカ先住民がアメリカ先住民として生きることができるようにならせよと、アメリカ人たちに迫っている。ロレンスはアメリカ先住民の置かれている状況をどのように捉えているのか、どうしてロレンスはアメリカ先住民を高く評価するのか、どのようなアメリカ人にどのような解決をロレンスは求めているのか、アメリカ先住民に対するロレンスの理解の内実を知るために、そういったことを中心に、この詩を見ておくことにしたい。

アメリカ先住民の置かれている状況に対するロレンスの認識は次のようである。<アメリカインディアンは、アメリカ政府の被後見者として、ここに生き残っている> (The American Indian lingers here, ward of the / American government.) (CP 776)、<アメリカインディアンは私たちのように存在していない> (CP 776) (he (=the American Indian) is not as we are.)、<アメリカインディアンは絶対的にあなたたちアメリカ人に支配されている> (he (=the American Indian) is so *absolutely* in your power,) (CP 776)、<アメリカインディアンは絶対的にあなたたちアメリカ人のなすがままだになっている> (He (=The American Indian) is so *absolutely* at your mercy.) (CP 777)、<アメリカインディアンはまさに滅ぼされようとしている> (the

Indian is about to be / finished off.) (CP 777)。

アメリカ先住民に対するロレンスの捉え方は次のようである。＜アメリカインディアンは昔の未開の世界から生き延びてきている、その世界には今もなお、意識の秘宝があり、文明の微妙で野蛮な諸形態がある。アメリカインディアンは基本的には、未開人だ。それは非難の言葉であるが、しかしまた、非難の言葉でもないのだ＞ (He (=The American Indian) lingers on from an old, savage world, that still has / its treasures of consciousness, its subtle barbaric forms of civilisation. / He is, basically, a savage : it is a term of reproach, / but also, it is not a term of reproach.) (CP 776)、＜アメリカインディアンはアメリカ土着の一つのものである＞ (He (=The American Indian) is the one thing that is aboriginally American.) (CP 776)、＜アメリカインディアンはだいたい、ずっと前にローマカトリック教徒になった未開人である。しかし、厳密に言えば、未開人である。アメリカインディアン特有の意識、アメリカインディアン特有の慣習としたり (儀式) を持っている未開人である＞ (he (=the American Indian) is a savage who has, for / the most part, long ago entered the Roman Catholic Church. / But strictly, he is a savage. / He is a savage with his own peculiar consciousness, his own / peculiar customs and observances.) (CP 776)、＜アメリカインディアンはアメリカ固有の種族の最後のものである＞ (He (=The American Indian) is the last of the originally American race.) (CP 776)、＜アメリカインディアンは (ここアメリカに) やって来たものでは決してない。やってきたのはあなたたちだった、アメリカ人たちよ＞ (the Indian never came. / It was you who came, Americans.) (CP 777)、＜アメリカインディアンは害にならない。数がずっと少ないので、いかなる方面でも心配をもたらすようなことはない＞ (The Indian does no harm. / He is far too few to cause any apprehension / in any direction.) (CP 777)。

このような認識に基づいて、ロレンスはアメリカ先住民がアメリカ先住民として生きることのできるようにすること、それはアメリカ人の義務であり、アメリカ人の名誉にかかわる問題であると、アメリカ人たちに訴える。ロレンスは、＜アメリカ人という名称が、もっともよい意味で取られるとき、高潔のしるしであるならば＞ (if, taken at its very best, the title *American* / is a patent of nobility) (CP 775)、＜それなら、ノブレス オブリージュ (高い身分に伴う道徳上の義務) だ (Then *noblesse oblige*.) (CP 775) として、アメリカ人の知的な人々にその解決を求める。ロレンスが訴えかけるのは、大衆でもなく、ある階級、党派に属する人々でもなく、知性を有する個々人の心に対してである。ロレンスはインディアンの問題が政治問題となり、＜相争う政党間の、利害関係者間の戦いの口実＞ (a *casus belli* / between conflicting political parties, and / contending interests) > (CP 777) にされてしまったことに憤慨している。ロレンスの意味する知性を有する人とは、アメリカ先住民に対するロレンスの捉え方を理解し、認める人であるということに当然含意するだろう。

アメリカ先住民がアメリカ先住民として生きていくことができるためにアメリカ人がなすべきこととして、ロレンスが提案する解決策は次のようである。＜あなたたちアメリカ人の高潔さで、アメリカインディアンの周囲に線を引くようにして、その線を越えてこれ以上の干渉を自制する＞ (let your American *noblesse* compel you / to draw a line around the Indians, beyond which line / you abstain from further interference.) (CP 779)。そして、アメリカ先住民の問題を政治問題にするのを止めて、アメリカ先住民を政治家たちの手から引き離す。そのために、アメリカ先住民局を、科学者、有能な人類学者、歴史家、文学者たちによって管理運営される十分な基金のある常設の局にするか、またはその管理運営をアメリカ民俗学協会に移す。

この詩はロレンスの生前、発表されなかった。

## IV

最初のニュー・メキシコ滞在中、ロレンスのものを見る眼は、特にイギリス・アメリカ文学によって培われたアメリカ西部に関する観念に支配されていたとすることができる。このことについては論じたことがあるので、ここでは要点だけにとどめたい。<sup>19)</sup> ロレンスはニュー・メキシコもそこに住むアメリカ先住民も、アメリカに来る前に持っていた観念に依って見ることに甘んじていた。ロレンス自身のことばを使えば、＜イングランドに生まれ、フェニモア・クーパー (Fenimore Cooper) によってアメリカインディアンに対する興味をかき立てられたので、私の心には、それ(ヒカリリヤ・アパッチ収穫祭 (Jicarilla Apache Harvest Festival) の場)は「乱暴で波乱に富んだ西部」(wild and woolly West)ではなかった><sup>19)</sup>、という失望に終わることになる。ロレンスにとって、アメリカ、ニュー・メキシコは一つの場所としてよりは、一つの観念として、つまり、新しい世界、自由の国、エデンの園、自然のままの野生の地、高貴なる未開人の住む所、としてあったのである。

最初のニュー・メキシコ滞在中、ロレンスは自分の見ているものが、自分の観念に合わないといって、失望するだけではない。ロレンスは自分の見ているものを、自分の観念に引き寄せて見ようともするのである。上に引用したのは、最初のニュー・メキシコ滞在中に書かれたエッセイ「アメリカインディアンと一人のイギリス人」の中の一節である。このエッセイで、ロレンスはアメリカ先住民と彼自身との間には、はるか昔の人類の起源にまで遡る共通項があることを認める。しかし、ロレンスは、ヨーロッパ白人の意識を有する人間として、アメリカ先住民のところには戻りたくないと感じる。だからといって、ロレンスはアメリカ先住民を否定したくもない、アメリカ先住民との関係も絶ちたくない。ロレンスは彼自身とアメリカ先住民との間に越えることのできない溝があることを感じながらも、その溝を越えることを願う。この願いは、アメリカ先住民を自然のままの野生の地に住む高貴なる未開人という彼の観念に引き寄せて見ようとしていることから生じてきたものではないだろうか。

また、ロレンスは自分の見ているものを自分の観念に見合うように見ようともする。最初のメキシコ滞在中に書かれたもう一つのエッセイ「あるアメリカ人たちと一人のイギリス人」では、ロレンスはアメリカ政府の推進するアメリカ先住民のアメリカ人化政策によって、＜(アメリカインディアンの) プエブロは解体に向かっている><sup>20)</sup>と、アメリカ先住民の置かれている状況を認識する。その認識に基づいて、ロレンスは＜アメリカインディアンに自然な死に方をさせよ> (CA 242)、と主張する。この主張を支えているのは、＜アメリカインディアンのプエブロは今でもアメリカの生活の中心にある> (CA 243)、＜アメリカ的であるのは今でもアメリカインディアンである> (CA 243) というロレンスの観念である。この観念はアメリカ＝高貴なる未開人の住む所の言い換えに過ぎない。

再度のニュー・メキシコ滞在中には、ロレンスは自分の見ているものをよく注意して見て、見ているものの表面の下にあるものを探り出そうとする。ロレンスは見ているものと自分との違いを認めた上で対象を見ようとする。そして、ロレンスは見ているものの他者性を理解しようとする。そのために、ロレンスはヨーロッパ白人の意識をできるだけなくすように、見ているものを一心に見つめる。一心に見つめることによって、ヨーロッパ白人のロレンスの意識は少なくなり、見ているものの他者性に近づくことができる。そして、ロレンスはそこにあるものを探り出す。ロレンスは異質なものを異質なものと見て、そこに近づき、そこからロレンス自身が生きていく上でも、人間が生きていく上でも価値があると思われるものを探り出そうとする。

そしてまた、ロレンスは異質のものが滅ぼされようとするときには、異質のものがそのアイデン

ティティイーを保持して生きることのできる道を考え出し、他の人々にも働きかけようとするのである。

## 注

- 1) D. H. Lawrence, 'New Mexico', *Phoenix*, ed. Edward D. McDonald (London: Heinemann, 1967), p.142. 以下引用は本書による。NMとして頁数を本文の括弧内に示す。
- 2) D. H. Lawrence, *Studies in Classic American Literature* (1923; rpt. Harmondsworth, Penguin Books, 1977)の第一章 'The Spirit of Place' 7-14頁参照。
- 3) *The Letters of D. H. Lawrence*, Vol. vii, Cambridge Edition (Cambridge: Cambridge University Press, 1993), p.25. 以下引用は本書による。viiとして頁数を本文の括弧内に示す。
- 4) Catherine Carswell, *The Savage Pilgrimage* (Cambridge: Cambridge University Press, 1981), p. 190. 以下引用は本書による。SPとして頁数を本文の括弧内に示す。
- 5) *The Letters of D. H. Lawrence*, Vol. iv, Cambridge Edition (Cambridge: Cambridge University Press, 1987), p. 541. 以下引用は本書による。ivとして頁数を本文の括弧内に示す。
- 6) 'Introduction', D. H. Lawrence, *St. Mawr and Other Stories*, ed. Brian Finney (Cambridge: Cambridge University Press, 1983), p. xxxv. 以下引用は本書による。MOとして頁数を括弧内に示す。
- 7) *The Letters of D. H. Lawrence*, Vol. ii, Cambridge Edition (Cambridge: Cambridge University Press, 1981), p. 259. 以下引用は本書による。iiとして頁数を括弧内に示す。第一次世界大戦中のロレンスのラーナーニムに関しては拙稿「第一次世界大戦初期のロレンス—ラーナーニム創設の夢—」(『東北大学教養部紀要』第42号, 1984) 43-61頁、拙稿「ラーナーニムを求めて—第一次世界大戦半ばのロレンス—」(『東北大学教養部紀要』第44号, 1985) 113-131頁参照。
- 8) David Ellis, *D. H. Lawrence: Dying Game 1922-1930* (Cambridge: Cambridge University Press, 1981), p. 148. 以下引用は本書による。DGとして頁数を括弧内に示す。ロレンスの伝記に関してはこの書によるところが大きい。
- 9) ロレンスとフレデリック・カーターとの出会いに関しては、拙稿「アポカリプスとD. H. ロレンス—『アポカリプス論』執筆の契機—」(『言語と文化』東北大学言語文化部紀要第5号, 1996), 179-98頁参照。
- 10) Harry T. Moore, *The Priest of Love* (New York: Faber, Straus and Giroux, 1974), p. 380.
- 11) Brenda Maddox, *D. H. Lawrence: The Story of a Marriage* (New York: W. W. Norton & Company, 1994), pp. 311-380. この書はロレンスがどうしてニュー・メキシコをラーナーニム実現の場所として選んだかを考える上でとても参考になった。
- 12) D. H. Lawrence, 'On Coming Home', *Reflections on the Death of a Porcupine and Other Essays*, ed. Michael Herbert (Cambridge: Cambridge University Press, 1988), p. 183.
- 13) 拙稿「D. H. ロレンスとアメリカ原住民」(『高知大学学術研究報告』第47巻 人文科学部 分冊, 1998), 161-172頁参照。
- 14) D. H. Lawrence, 'Indians and Entertainment', *Mornings in Mexico* (1927; rpt. Harmondsworth: Penguin Books, 1986), p. 53. 以下引用は本書による。MMとして頁数を本文の括弧内に示す。
- 15) *The Letters of D. H. Lawrence*, Vol. v, Cambridge Edition (Cambridge: Cambridge University Press, 1989), p. 36.
- 16) D. H. Lawrence, 'Dance of the Sprouting Corn', *Mornings in Mexico*, p. 62. 以下引用は本書による。頁数はMMとして本文の括弧内に示す。
- 17) D. H. Lawrence, *The Complete Poems of D. H. Lawrence*, eds. Vivian de Sola Pinto and Warren Roberts (London: Heinemann, 1972), p. 777. 以下引用は本書による。頁数はCPとして本文の括弧内に示す。
- 18) 詳細については、拙稿「D. H. ロレンスとアメリカ原住民」、特にII、III参照。
- 19) D. H. Lawrence, 'Indians and an Englishman', *Phoenix*, p.94.
- 20) D. H. Lawrence, 'Certain Americans and an Englishman', *Phoenix II*, eds. Warren Roberts

and Harry T. Moore (London : Heinemann, 1968), p. 242. 以下引用は本書による。頁数はCAとして本文の括弧内に示す。

Key words : D. H. Lawrence, New Mexico, Native Americans.

平成12年(2000)9月30日受理

平成12年(2000)12月25日発行

